

阿 部 近 一*: タヌキノシヨクダイの生活環境

Chikaichi ABE*: On the habitat of *Glaziiocharis Abei*.

奇怪なる珍草タヌキノシヨクダイ（一名トウロソウ）は不肖の去る昭和 18 年 6 月 22 日徳島縣那賀郡大龍寺山龍ノ岩屋に於て發見したるものであつて、本年は再びそれが大量に發見せられその形態構造を詳に學界に發表するに至つた事は誠に喜ばしい次第であつて、その再發見者篠原勇氏に對して深甚の謝意を表する次第である。

本植物の生態に關しては簡單ながら屢々報告した所であるが、この度その命名者赤澤時之氏によつてその全貌が明らかにせられるに及び、茲にその生態と環境について聊か詳細を極める事もあながち無意味ではなく且これが今後その新産地を求める上に於て何等かの参考ともなれば誠に望外の幸と存ずる次第である。尙本植物の再發見に至る間、直接御指導乃至は御忠告御激勵を賜つた牧野富太郎博士並本研究について種々御便宜を御圖り下さつた津山尚博士に對して深甚なる謝意を表する次第である。

(1) 所屬

本植物は Burmanniaceae ヒナノシヤクジョウ科の植物中 Thismieae の亞群 Euthismieae に屬するものであつて、本科 125 種中本群のものは特に熱帶系に屬しかつて世界の温帶に於て發見せられた例としては南半球に於ける Tasmania と New Zealand 及北半球に於ける北米 Chicago 附近の二種のみであつて、今回はその世界に於ける第三回目の發見に當る譯である。本植物の屬する Genus *Glaziiocharis* は Brazil に於て僅かに唯一度發見せられたものであつて、その根莖並果實は未詳とせられてゐたがこの度はその二度目而かも日本に於ける本群のものとしては之を以て嚆矢とし、明治以來急速に明らかとなつた本邦 Flora の上に一大光彩を添へるものと謂ふべきであらう。

(2) 生態

筆者の本種發見の動機は石灰岩地に於ける特産陸貝の採集であり、篠原氏の發見も亦同じく石灰岩化石採集の副産物であつた。従つて本植物は石灰岩植物の一とも謂ひ得られるけれども或は又その特殊條件の偶然一致とゆう事も考へて見る必要がある。

本種の花期は大體 6 月下旬に始まり 8 月中旬に終る。暖地潤葉樹下の陰湿地で極度に腐蝕した落葉中に生じ、根莖は淡褐色で表土に淺く横走し到る所分岐してその節部から所々花莖を抜き或は次の新芽を藏する。従つて本植物は牧野博士の豫想通り群落を形成する事が多い。その細鬚狀の所謂菌根は腐葉や腐蝕の朽枝にからみ、花莖は落葉中に伸び直上或は斜上してその長さ 1-5 cm に及び、數枚の葉は不完全にして或は密に或は疎にして僅かに莖を包み莖と共に乳白色を呈する。花部は極めて柔軟で落葉を抽くに堪へず従つて花筒部を地上に現はす事は殆んどなく、極めて稀にそのドーム狀部乃至は縁合

* 徳島縣那賀郡學島中學校 Gakujima-Chugaku, Oe-gun, Tokushima-ken, Shikoku, Japan.

する内花被片上に附屬する 3 本の角狀突起を僅かに出現する。かくの如くその大部分は落葉中に埋もる爲靜かにそれ等を掻き除かない限り殆んどその發見を見る事は不可能である。花は 2~4 片披針狀銳尖の苞片に包まれ倒瓢狀で子房は下位、何れも子房上部に於て必ず不規則に屈曲し花筒部には僅かに一二の縦條を備へる。蕾は全面を苞に包まれ棍棒狀を呈し既にして 6 本の突起を竝立する。花筒上部には 6 枚の花被片を稍々輪生し、その外花被 3 片は何れも發育せず之に附屬する角狀突起の基部を上より包み突起は側方下部に屈曲する。内花被 3 片は先端急に擴がりその上部は内曲縁合して三層に重なり癒着して三脚のドームを形造り、その附屬體は附着癒合して上半中部に達しそれより離在直上し先端は夫々外側に屈曲し角狀を呈する。その狀恰も石燈籠の如く或は燭臺に擬して茲に二つの和名トウロソウ(阿部)並びにタヌキノショクダイ(赤澤)を設ける所以である。

色は全く乳白色を呈し子房部は稍黃色味を帯び殊に花の終期に著しい。花筒部は半透明で内部の構造を透視する事が出来、殊に液浸すれば愈々明らかとなり容易に柱頭並に花喉部より垂下して環帶狀に連なる雄蕊を目撃する事が出来る。花喉部は極めて淡き綠色を呈し且短毛を密生する。花は前述の如く殆んど落葉下に開花するけれども授粉は虫媒によるものの如くドーム狀部より出入する極めて微小の二翅類(?)を目撃した。花期を終へると花は子房の上位に於て一條の横環を生じそこから花筒部はそのまま脱落する。

(3) 生育環境

A. 徳島縣那賀郡大龍寺山龍ノ岩屋 (Jun. 22, 1943)

本地域は年平均 C. 16° - 17° の等溫線圏内にあり氣候溫暖にして雨量に富み、シヒ、カシ類の厚葉闊葉樹多くシロヤマシダ、ナチンダ、ナチクジャク、キシウシダ、ウスヒメワラビ、タキミシダ、ヒカゲワラビ、クルマシダ、イワヘゴ、ケイビラン、カシノキラン、マヤラン、ガンセキラン、ベニカヤラン、カギカヅラ、カラスザンショウ、シタキソウ等の暖地性植物多く、到る所石灰岩の大露出を見る外所謂龍ノ岩屋の洞窟を作る。それ等の露頭の間には溪流が走りシラカシ、アラカシ、イスノキ、タブノキ、カゴノキ、アヲガシ、ヤブツバキ、イヌマキ、タイミンタチバナ等常緑を始めイヌシデ、オホモミヂ、イロハモミヂ等落葉喬木枝を交へて晝尚暗く陰濕を極めて落葉が山積する。本植物はその石灰岩壁の側邊、溪流に沿つて生育する。想うに最初その發見個體の少かつた事は花期尚早であつて恐らくその開花始期にあつた事と尙一つは他に採集目的を有してゐた爲であつた。元來この様に軟弱なる生物の生育は極めて特殊の環境條件に支配せられるものであつてその生育範圍も亦非常に極限せられる場合が多い。その後凡ゆる努力にもかかわらず尙且その發見に至らなかつた所以は、本種の週期的開花説もあるけれども寧ろその開花期の誤認と産地の荒廢(貝類採集並びに出水等)等その外的な影響によるものと想像せられる。

B. 那賀郡澤谷村小畠 (Aug. 4, 1950)

本地域は大龍寺山を去る凡そ 24 軒の那賀川上流に當り年平均氣溫凡そ C. 14° 、雨量

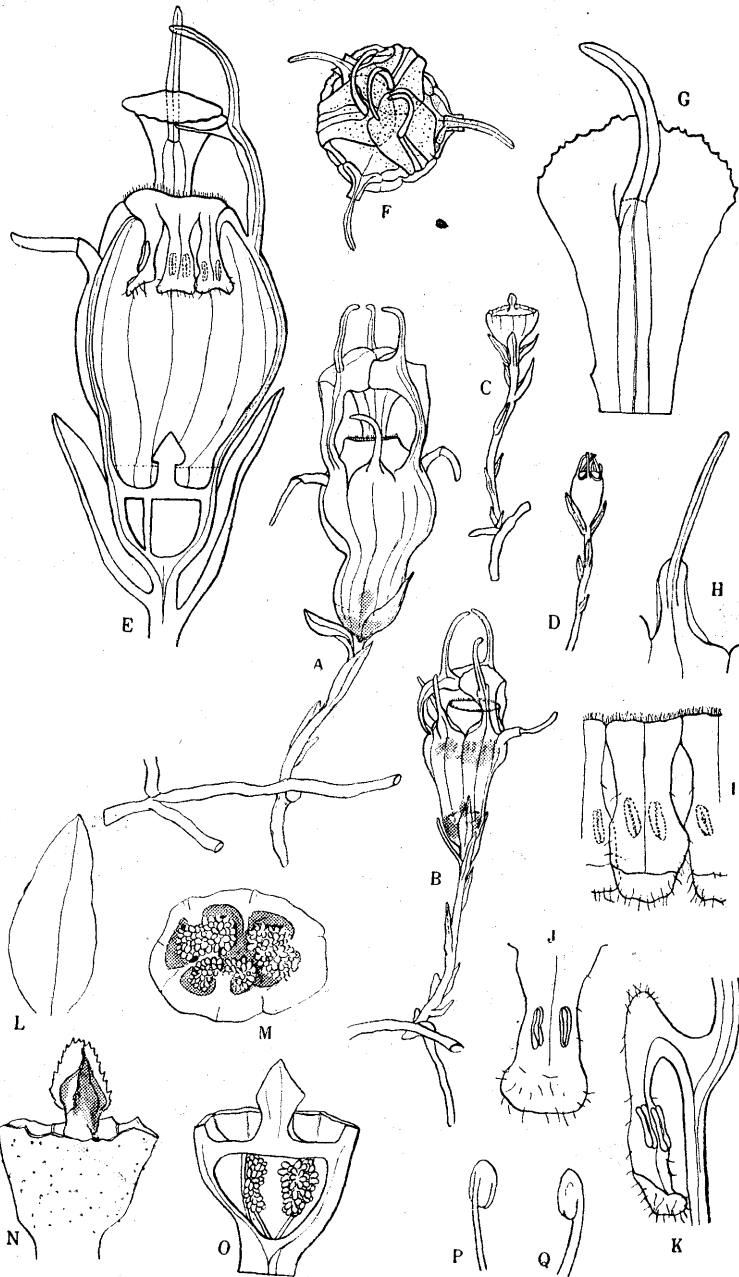
2800-3800 耗にして本邦でも屈指の多雨地帯に屬する。植物相では相當奥地とは謂へウバメガシ、アラカシ、シラカシ、アヲガシ、ヤブニクケイ、タブノキを始めケイビラン、ウチョウラン、ホトトギス、ナツエビネ、ヨウラクラン、ハカタシダ、コガネシダ、トキワシダ、イワヘゴ、イワユキノシタ、オオコゴメカマツ等の暖地性植物多く殊に暖地海岸地帯を埋めるウバメガシが陸續としてその巨幹を交へる様は一種異様な感を深くする。恐らく之は一に那賀川の豊富な水の影響によるものであつて、本地域は大體その限界點に當る。本植物の生育地是那賀川の本流より急坂約1 軒の東南斜面の中腹、標高約700 m に位し石灰岩の露頭多く、徑 10-25 cm に及ぶ杉の人工林内にある。林内並その附近にはモミ、カヤ、イヌガヤ、エゾエノキ、ハリギリ、ネムノキ、アセビ、ウリカヘデ、シラキ、イヌシデ、クマシデ、アカシデ、アワブキ、ウリノキ、ダンコウバイ、イロハモミヂ、フデキ、カナクギノキ、リョウブ、ミヤマフエイチゴ、シマカンギク等の温帶性要素の外タブノキ、ヤブニクケイ、カゴノキ、シロダモ、ヤブツバキ、ウバメガシ、アラカシ、ウラジロガシ、ツクバネガシ、ゴンズイ、アヲキ、イヌビワ、テイカカヅラ、ツルマサキ、イタビカヅラ、リュウキュウヤブラン、オニカナワラビ等多數の暖地性植物を混じその上側面には石灰岩の大露頭を負ふ。生育は主として陰濕の杉の落葉中に多く、殊にそのよく腐蝕した堆積植土中に多い。分布面積は凡そ 0.5a に達しその中心地に於て到る所小群落を形成する。想ふに本地域はもともと原始暖帶林下にあつたが、いつしか杉の植林に切替えられ漸くその生命を保持しつつ今日に及び漸次その條件の回復と共に再び大繁殖を見たものと想像せられる。地質、氣象、植物相、光度、溫度等環境條件は殆んど大龍山と變る所はないが民有の植林地内の事として何時又伐採の厄を受けぬとも限らず、悔を將來に残さない様今後その保護育成の途を講ずる必要を痛感する。

Pl. II, fig. 2. 那賀郡澤谷村小島の全景、矢印はその生育地を示す。

Pl. II, fig. 3. 林内に於ける *Glaziocaris Abei* の生育とその群落。(Aug. 4, 1950) 落葉を除いて撮影、周圍には落花後の果實多數を見る。

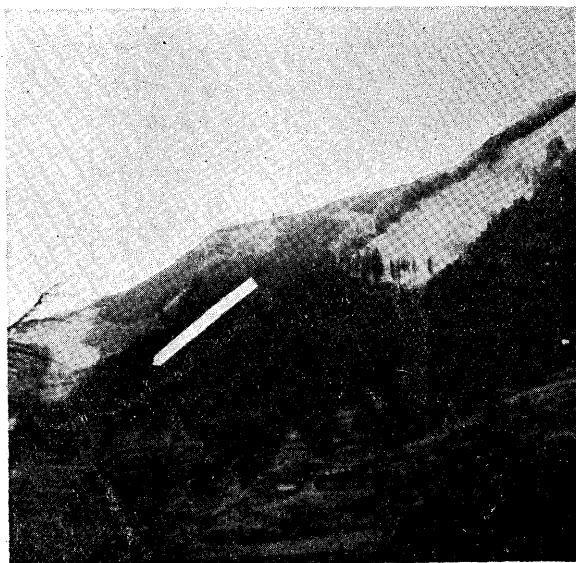
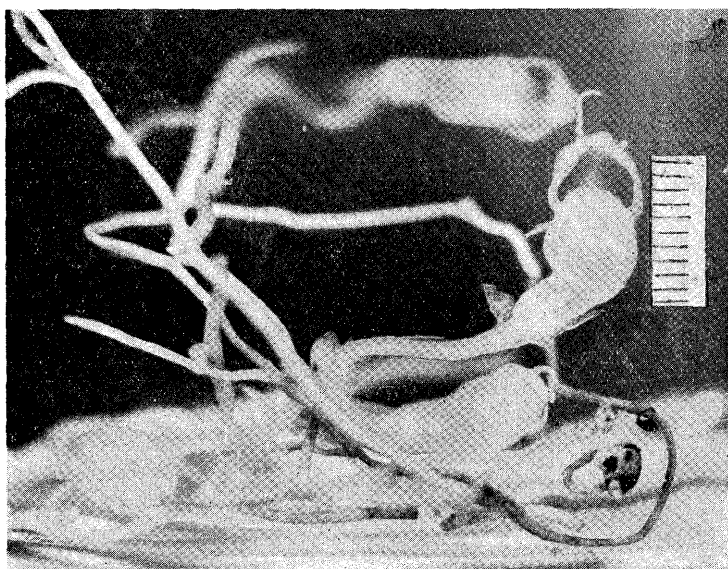
オトルコギキョウとは何か (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: *Eustoma selenifolium* is cultivated in Tokyo.

昨年頃から、夏から初秋にかけて、東京の切花やのまどにトルコギキョウと稱するキキョウに似た切花が見られる。この花はトルコと反對の方角の中米原産のリンドウ科のもので、學名は *Eustoma selenifolium* Salisb. で *E. exaltatum* の名で Botanical Register (1845) に 13 圖として、原色圖がある。全株灰綠色、對生葉は卵形又は橢圓狀披針形、鏡頭、全縁、長さ 5 cm。萼裂片 5、線狀、綠色、花は一見キキョウのようで、徑約 6 cm であるが、深く 5 裂し、裂片は倒卵狀で頂部細波狀、碧綠色、筒部は短くて白色、花心に濃紫斑がある。雄蕊 5、花糸は直立し長さ 5 mm。雌蕊は長さ約 1 cm、淡綠、柱頭は幅ひろい黃色の 2 片に分れる。なお、つぼみのときにはよれる。開花は光線の不足により、やや閉さる傾向がある。花色には變化あり、また腊葉では白色部も紫色をおびる。



AKASAWA: *Glaziocharis Abei*

第 1 圖



第 2 圖

第 3 圖



Glaziocharis Abei

圖版説明は赤澤及び阿部論文中にある。